
イエローローズ・ラブソディー

星宮ワルツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イエローローズ・ラブソディー

【Nコード】

N11770

【作者名】

星宮ワルツ

【あらすじ】

果てしない暗闇の世界。目を開けることも、言葉を話すことも、音を聞くことも、動くことすらできない絶望の世界。
誰も見えない、俺一人だけの永遠の孤独の世界。「植物人間状態」
…姉様、あなたにその苦しみが分かりますか？

これは植物人間状態の少年「フェラ」が「姉様」にあてた言葉。
永遠に伝わることのない文面のない手紙。

これは、孤独に囚われた少年とその姉の最期を描く、黄色い薔薇の

狂詩曲。

1：闇

姉様、貴女にわかりますか。

わかるわけですね。俺が毎日ベッドに寝たきりで過ごしている間に、姉様は天才女騎士としてその名を轟かせ、出世し、輝かしい人生を送っていたのですから。

俺がどんなに苦しい思いをしていたか貴女にはわからないでしょう。だから俺を見捨てたのでしょうか。

手も足も動かせない。目を開くことも何か喋ることも耳で音を聞くことすらできない。傍らに誰がいるのかいないのか自分で確かめることすらできない。

魔法で相手側から直接意思を伝えてくれなければ、他人の存在を感じられません。

手足を封じられ、自分の五感までがんじがらめに縛られて、俺の知る世界は人生はずっと真つ暗でした。

まるで死の世界です。それなのに俺がここに「在る」という意識だけは呪いのように在るのです。

けど、俺がここに在るという感覚に「そうだよ、お前はここに在るよ。」と答えてくれる人を俺は見つけられないのです。

いつそ死んでしまえたらどんなに楽だろう。けど死ぬことさえできない。「植物人間状態」…その苦しみが、姉様にわかりますか？

昔はよく二人で遊んだものでしたね。おもちゃの剣を持ち出しては、よくチャンバラごっこのように勝負しましたね。

一度も姉様に勝てなかったことをよく覚えています。

そういえば当時から姉様は天才と呼ばれていました。剣の腕なら大人の男性にも負けやしない。これは将来素晴らしい女騎士として王

様王女様をお守りしてくださるだろうと、誰もが噂していましたよ、気づいてましたか？

代々王家サラサーテ家にお仕えし、騎士として王族の方々をお守りしてきた俺達の一族にとって姉様は誇りだったようです。

そのことにはさすがに気づいていたでしょう。けど姉様はそんなことを鼻にかけることもなく、いつも堂々としていて、勇敢で…男の人よりもずっと立派で勇ましい騎士でした。

けど実際は結構人見知りが激しくて恥ずかしがり屋だったり、密かにドレスとか女の子らしいものに憧れていたたり…お菓子のような可愛い名前に相応しい一面も持っていたことも知っています。

昔俺があげた紅い宝石のイヤリング、「こんなものつけてられない」と言いながら、内心結構嬉しそうだったの、バレバレでしたよ。

けど外ではそんな面を少しも見せず、立派な騎士として振る舞い、巧みな剣術でどんな敵も倒していく…俺は姉様を尊敬していました。姉様はずっと俺の憧れでした。

尊敬が憎しみに変わったのがいつの頃か、俺にはもう思い出せません。時間の感覚すらもうよくわからないんで。

ただ、きっかけが何かははっきり覚えていません。

さすがに姉様もわかるでしょう。始まりは俺が植物人間状態に陥った時でした。

人がこんなにもあっけなく再起不能になるものだなんて思いませんでした。俺は脆いですね。

たしか猛スピードで走る馬から落ちた時、打ちどころが悪かったのが原因です。落ちた場所が酷い山道の岩場だったんで。

意識を取り戻した時に、まず驚いたのは目が開かなかったことでした。だから実際には意識を取り戻したとは言えないのかもしれないね。

そして音が聞こえません。手が足が動きません。自分の五感を感じません。怪我の痛みさえわかりません。

俺はパニックに陥りました。俺は助かったのか死んだのか。最初は死んだのかとも思いました。けどすぐに違うと感じました。死人に意識はありません。あつたらそれは生きているということでしょう。定義は人それぞれでしょうが少なくとも俺はそう思います。そしたら、医者言葉が伝わってきました。

『フェラ様、気づかれましたか？無事で何よりです…！』

どこが無事だ。怒鳴り散らしたかったけど、当然できませんでした。けど俺に意識があり、怒っていることは伝わったようでした。

『驚かれたでしょう…私たちも驚きました。このような例は大変稀です。』

よくお聞きください。貴方は今いわゆる植物人間状態です。今は魔術を使用し、フェラ様の意識に直接言葉を送っております。

でも予想外でした。大抵植物人間状態の方は意識がはっきりしておらず、他人とコミュニケーションをとることは困難…なのにはつきりとした意識があり、しかもこちらの意思に応えることができるとは…奇跡です！

大丈夫ですよフェラ様、回復の見込みはあります。きっとすぐにまた元気よく駆け回ることができるようになりますよ。』

医者の言葉にその頃の俺は少しだけほっとしました。今は愚かだったと思いますが。

その時は父様も母様も、そして姉様もお見舞いに来てくださっていたようですね。魔術を通して姉様の言葉も伝わってきました。

『全くあんたって奴は…。本当に死んじゃったんじゃないかってひやひやしたよ。』

でも良かった。植物人間状態とはいえ生きてたんだし。

辛いかもしれないけど元気出しな。あたしも見舞いに来てやるから。」

その言葉で俺がどんなにほっとしたことでしょう。

自分が植物人間状態だと気づいた時、俺は不安で寂しくて仕方がありませんでした。この状態はまるで一人ぼっちの牢獄に閉じ込められたかのようなものでした。

こんなこと言うと、またお前の寂しがり屋と甘えん坊にはもう疲れたと呆れるかもしれませんが、俺には重要なことだったんです。

それから姉様は何度も俺の見舞いに来てくれましたね。その度に様々なことを話してくれましたね。父様と母様のこと、騎士団の人々のこと……姉様がやってきて話をしてくださることが俺の唯一の楽しみでした。

姉様の話を聞いている時だけ、他人の存在を感じられました。姉様の話に俺が答える時だけ、自分の存在を感じられました。

実のところ、まともにお見舞いに来て、話をしてくれる人は姉様だけだったんです。

父様と母様はめったに俺の所に来てはくれなかったし、昔の友人達も初めのうちは心配して何度も見舞いに来てくれましたが、そのうち俺のことを忘れていきました。

俺だけ一人取り残されたような気がしました。ものを話すこともなく、ただベッドに横たわっているだけの俺の存在が重要だと、そう感じてくれている人はいなかったように思います。

植物人間状態の子は可哀想だねと他人事のように同情する人はいたとしても、俺：フェラが可哀想だとか、起き上がることは出来なくても顔を見に來たいとか、そういう人はいません。

いつそこうなる前に誰かに派手に喧嘩でも売って、自分を忌み嫌うような敵でも作っておけばよかったかなと後悔しました。

忌み嫌われるということは、俺は『在る』と認められるということですから。忌み嫌われる以上の苦しさ、姉様にわかりますか？ここ

に在るのに、そのことを認めるか認めないか：ジャツジする人を見つけれない苦しさがありますか？

ある時俺は気づきました。俺の存在を霞ませているのは姉様だと。俺は元から目立たない存在だったと気づいたのです。父様と母様は昔から俺より姉様のことばかり重要視していましたし、外に出ても女騎士でしかも強いという物珍しさからどうしても姉様の方が目立ちます。

今思うと「フェラ」と呼ばれることより、「あの女騎士の弟」と呼ばれることの方が多かったですし。

一瞬俺は姉様を妬みました。けどすぐにそんな考えは振り払いました。

姉様は何もしていません。誰も悪意を以て俺を陥れようとしたわけではないのです。誰も悪くはありません：だから苦しかったんですけどね。

それに何より、姉様はいつも俺の見舞いに来てくれる唯一の人です。その姉様を憎み妬むなんて俺はおかしいと思いました。

そんな時でしたよ。あの日の姉様の訪問が、最後のお見舞いになるなんて思ってもいませんでした。

その日の姉様がいつもと違うことはすぐわかりました。目も見えないうし、耳も聞こえないけどなんとなくいつもより複雑そうだなと感じました。

姉様は平然を装ったつもりでしょうが、話し方だってどこか浮かない様子でした。

『今日さ、首都の城に呼びだされてね、初めて王女様に会ったんだよ。ルル力様っていううちっちゃいガキンチョでさ。』

『姉様、そんなこと言ってるの聞かれたらぶっ殺されるぜー？』

『平気だって。魔術で話してるわけで、実際声出してるわけじゃないし。』

いかにも童話に出てきそうな無垢なお姫様ーって感じでさ。長ーいくるくるウェーブの金髪とか蒼い目とか典型的すぎて笑いそうになった。……。」

『姉様？どーかしたのか？』

急に姉様の言葉が途切れたので俺は心配でした。けど結局姉様は理由を話してくれませんでしたね。

『うつん、何でもない。』

そう言うてはぐらかしました。そして結局詳しいことは言わないまま、姉様は行ってしまいました。

そして翌日から、姉様は俺の所に来なくなりました。来る日も来る日も待ちました。けど姉様は来ないどころか連絡すらくれませんでした。

姉様に何があつたのか俺は心配で仕方ありませんでした。医者にそのことを問いただしましたが詳しいことは話ませんでした。それから、本当の地獄が始まりました。真つ暗闇の中、目に見えるものも耳に入る音もなく、ただ自分の意識だけがさまよっている世界。見舞いに来てくれる人もなく、ただ何もない時間が過ぎていくだけ。いつしかぼっかりと穴が空いたような不安感を覚えるようになりました。

まだ俺は生きているのに、まるで世界から俺がいなくなってしまうように感じました。

実際はそうではなかったのかもしれませんが。父様も母様も姉様も、心の奥底で俺のことを心配していたとかそんな都合のいい可能性を

否定しきれるわけではありません。

けど、俺自身がそう思えなければ俺にとってはそんな心配なんてなかったのと同じです。

かまってもらいたいたとか見舞いに来てほしいだとか、他人の都合なんて全く無視したわがままな願いだということはわかっています。けど俺は確かにここに在ると、そう認めてもらいたいと思うことはそんなに忌むべき願いでしょうか。

無関心が意図的な無視より酷い暴力だと、そう感じるのは俺だけです。

結局俺は寂しかったんだと思います。そして羨ましかったです。だから、急に見舞いに来なくなった姉様をいつしか恨むようになったのかもしれませんが。

俺を見捨てたと、そんなことを思ったのでしょうか。所詮俺はただのガキです。

果てしない暗闇が続きました。一向に植物人間状態から回復する気配はありません。

俺は何度も医者に殺してほしいと頼みました。勿論医者は断りました。

もう何かを考えることも嫌になり、生きているのか死んでいるのかもわからないまま時が過ぎていきました。

もう日の境も季節もわかりません。医者が今日は何月何日だとか、春で桜が綺麗だとかそんなことを言っていましたけどどうでもよくありません。

そんなある時でした。俺に話しかけてきたのは全く知らない人でした。

『おや…薔薇があるね。黄色い薔薇か、綺麗だね。』

嫌味かと思った…というか嫌味でしょう。薔薇なんて俺が見ること

はできませんから。黄色い薔薇：誰かが花瓶にでもさして行ったのでしょうか。

俺は苛立ちながら問いかけます。

『誰だお前。』

『なる程、本当だ…意識は健康な方と全く変わらないね。』

『だから、誰だてめえ。』

『僕？ああ、名乗るのを忘れていたね。』

僕はネビュラ・エヴァンス。

そして今君に言葉を伝えるための魔術を使っている人がいるんだけど、そいつがテルル・トーラ。』

嫌な予感がしました。エヴァンスという家は聞いたことがありました。

たしか俺や姉様の家同様に代々王家に仕えてきたという家です。俺や姉様の家からすればライバルです。

俺は半ば喧嘩腰で尋ねました。

『エヴァンスの奴が何でここにいるんだ。』

『お医者さんに頼んで許可を貰っただけだよ。』

『迷惑だ、帰れ。』

『おやおや生意気だね。せつかくいい話を持ってきたっていうのに。』

敵意をむき出しにし、相手を睨みつける…それができればどんなによかったでしょう。

突然やってきたライバルの一族の見ず知らずの人を信用できるわけありません。俺は警戒しました。一体何の用だというのでしょうか。ネビュラと名乗った人物は俺に言いました。

『いい話というのはね、君を植物人間状態から解放してやろうということさ。』

俺は耳を疑いました。そんなことができるのでしょうか。

そもそもどうしてエヴァンスの人がそんなことを言いに来たのでしょうか。

『解放とはいっても以前と全く同じとはいかない。時間制限がある。時間は二時間だ。君の体を一時的に元の状態に戻すことができる魔法を見つけ出したんだ。この魔法見つけるの苦労したんだよ。二時間の間、君は植物人間状態になる以前と同じように動けるようになる。』

ネビュラの話はまるで夢のような話でした。たとえ一時でも光を見ることができれば、少しはこの暗闇から解放たれるような気がしました。たとえ目覚めた時一人ぼっちでも、光と音を感じられれば、生きている確信が持てる気がします。

明るい光、澄んだ音、そんな世界を歩き回れたらどんなに幸せでしょう。本当に夢のような話です。

けれどそんな都合のいい話、何の代償も無しに舞い込んでくるはずありませんでした。

ネビュラは続けて言いました。

『その代わり、君の家族を殺してほしいんだ。』

時間が一瞬止まってしまったような心地がしました。

家族を殺す。父様と母様を、そして姉様を殺す。それがどういうことか。その結末を理解した時、俺の心臓の音が激しくなるのが聞こえた気がしました。

家族とは、本人の意思とは関係なしに関わりがある人。たとえどんなに冷え切っている家族でも、バラバラに住んでいるような家族でも、
は自分の家族であるという事実は消えない。

生きている限り、どんなに薄い存在でも俺は父様と母様の息子で姉様にとっては弟だ。繋がりがあある。生きている限り、俺が何かを証明できる存在保証の命綱。

姉様達が死ぬということは、俺と関わる人が本当にいなくなるかもしれないということです。

『僕たちエヴァンス家は今王位の奪還を計画しているんだ。そのためにクーデターを起こすつもりなんだけど、それには君たちの一族が邪魔でね。』

君の親戚なんかはこちらで始末する。君は家族を殺しておいてほしい。』

ネビュラの声がやたら遠くに感じました。俺が殺す。姉様達を殺す。その言葉だけが何度も反響して聞こえたような気がしました。

姉様達を殺す。俺はそのことが初めは怖くて仕方ありませんでした。

いくら回復するといっても二時間経てば俺はまた植物人間状態に戻るのです。姉様達を殺した忌まわしい記憶と共に俺は再び孤独の闇に放り込まれるのでしょうか。

俺は臆病で寂しがり屋のただのガキ。きつと一生悔やむでしょう。真っ暗闇の中、孤独に罪悪感が加わった地獄の中で、いつそ死にた

いと願いつけながら死ぬことすらできずに俺だけ生き長らえるのでしょう。

想像したくありません。今以上の地獄なんて。

それなら、今のままの方がマシかもしれない。そんなことを思った時にネビュラは言いました。

『そうそう、君の家族は今首都に住んでるから、ちょっと汽車で移動するから。まあ、20分くらいで着くけど。』

俺はそんなこと全然知りませんでした。聞いた覚えがありません。俺の家族はずっとこの病院から数分のところにある屋敷に住んでいたはずです。首都に住むだなんて夢のまた夢だったはずなのに。

『あれ、知らないの？』

君のお姉さんが王女様付の護衛になったんだよ。それで首都に住んでいる。

全く、君のお姉さんは凄いな。』

皮肉のように聞こえました。多分皮肉でしょう。何かが煮えたぎるような感じがしました。

久しぶりにこの感情が沸きました。ネビュラと、姉様達に対する怒り。

姉様が最後の見舞いの時にどこか浮かない様子だった理由が今ならわかります。そしてそれ以降俺のところに来なくなった理由も。結局、俺は見捨てられたわけです。暗闇の世界が更に真っ黒で塗りつぶされたような気がしました。

結局、父様と母様と姉様、三人いれば無理なく成り立つわけです。俺は必要なかった。だから、俺を一人残していったのだと。寂しくて悲しくて、ただ俺は憎みました。

そして怒りと同時に自分の中で何かが空っぽになりました。もうも

う辛く思うことにすら疲れてきました。けれどまがいなりにも生きている限り、忌まわしい「感情」というものはついて回ると、思い出して虚しくなりました。

そして俺はネビュラに言いました。

『条件がある。』

『何かな?』

空っぽの願いを伝えました。

『全部終わったら、俺を殺してくれないか?』

ネビュラは急に笑い出しました。腹をたてる気力すらありませんでした。

『いいだろう。』

こうして、取引は成り立ったわけです。

1：闇（後書き）

全2話の予定です。ひそかに「ある魔女のための鎮魂歌」と世界観がつながっていたりします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1177o/>

イエローローズ・ラブソディー

2010年10月9日15時39分発行